

モヤモヤ ワクワク

地域の「第三の居場所」

駄菓子屋の屋台づくりに取り組む中学生―東京都杉並区で



空き店舗を改装した地域のスペース「まちナカ・コミュニティ西荻みなみ」（東京都杉並区）では、二〇一九年から子どもが自由に過ごせる時間を設けた。地域に今、子どもたちが自由に遊べる場所は少ない。ここは子どもにとって家でも学校でもない「第三の居場所」になっているという。利用する男子の一人は「自分たちが決めて、大

人たちが協力してくれるから居心地がいい」と話す。西荻みなみでは放課後、子どもたちが読書をしたり、工作をしたりしている。商店が並ぶ通りで毎月開かれる朝市では、子どもたちが駄菓子を売る活動にも取り組んでいたが、コロナ禍の今は、再開後に備えて屋台をつくっている。子どもたちの活動を支援する

自分で決めるって楽しい

スタッフは、できるだけ子どもの主体性を引き出すように心掛けていているという。総括プロデューサーの秋山成子さん（五十）は「親でも友達でもない、地域の大人が見守るナナメの関係性を築けたら」と語る。

四月中旬の日曜日、小中学生五人が黙々と屋台づくりの作業をしていた。この日は午前十時から休憩を挟んで夕方まで取り組み、屋台二台に柵板や屋根を取り付けた。

屋台の絵を描くところから始め、設計図も描いた。外部講師に道具の扱い方を習って木材を切り、組み立てる。「ここは自分たちの意見を大事にしてくれる」と中学二年の男子生徒（ミ）が話す。ここで知り合ったという同じ年の男子もうなずく。「楽しいですよ」と別の男子が笑う。

男子生徒は「学校では先生に友達関係にまで口出しされる」といい、理不尽と思うことも多いという。大人たちが話をしていると、休憩していたこの生徒が「よし、やろう」と再び屋台づくりに立ち上がった。「やるか」と応えた男子は、おもむろにやすりをかけ始めた。（奥野斐）